

第3章 長崎地区の取り組み

1. 里山再生・集落再生の取り組み

1-1. 未耕作地・休耕地・農業用水路・農道の整備

[目的]

地区内の未耕作地で荒れ放題になっている農地を集落の住民の協働により整備し、大豆等の転作をおこない、適正に利用するとともに、地区の農村景観の保全と生物多様性保全の観点から順応的管理をおこなうための基礎を作る。

[内容]

未耕作地の植生の管理：草刈機により圃場内の低木や高茎草本の刈り取りをおこない、修景を図る。今後使用する休耕地においては、重機により圃場の整地等をおこない、耕作可能な形にもどす。

排水路の整備：素堀の排水路を整備することにより、湛水している休耕地の排水を促し、乾燥させ大豆等の栽培に利用可能となるように整備する。同時に、生物多様性の観点から水生生物の生息環境を提供する。

農道の整備：農作業の効率化のために必要な農道の整備をおこなう。陥没している場所や軟弱な場所に土砂を入れる。一部路幅を拡げる。農道の山側斜面管理により日当たりを良くするとともに崩落の防止を図る。おもに重機による作業として、補助的に人手による伐採作業をおこなう。

ビオトープ及び湿地造成：休耕地や余地を利用して、“湿地型”または“ため池型”のビオトープを複数整備する。水生生物の生息環境を造成するとともに、ビオトープを自然観察会など交流のためのしくみづくりに活用する。ビオトープの一部は、ドジョウ、カワエビなどの養殖場としても活用し、特産品づくりの活動との連携を図りながら管理する。

[実施状況]

別図に示す箇所で、活動を実施している。



未耕作地の整備活動(上2枚)、整備後の状況(下)



左：排水路の整備（素堀）、右：ビオトープ

1-2. シードバンク調査

[目的]

従来の里山管理がおこなわれていた時代に地区内に生育していたと思われる植物や、かつて生育が確認されていたが、現在では消滅している植物について、シードバンク調査（埋土種子調査）を実施し、埋土種子の発芽を促し、生物多様性の向上を図る。

[方法]

かつて植物が生育していた情報がある地点など、埋土種子の存在が予想される地点を抽出し、手彫りまたは重機により表土の一部を取り除く。とくに水生植物の発芽を期待することから、掘り起こした場所は段階的に湿地から深い湛水までの状態をつくり、埋土種子からの出芽の状況を観察する。

[実施状況]

これまで表土の除去や湛水を断続的に実施してきた場所において、ミズオオバコ、イトトリゲモ、ホッスモの生育が確認された。いずれも近年長崎地区からは確認されていなかった希少水生植物である。3月14日には、大規模な掘り起こしをおこない、今後の発芽を期待しているところである。



シードバンク調査 左：ホッスモ・イトトリゲモが出現。右・ミズオオバコが出現

1-3. 里道の整備

[目的]

かつて向田に通じていた里道を復元し、散策路とするとともに、今後の作業道として里山保全活動において活用する。自然観察会などの交流促進のしくみづくりの中でも活用する。また集落住民が、山に目を向けるきっかけとなり、山の幸を活かした特産品づくりなどに利用されることを期待している。

[方法]

数名より継続的に倒木の除去や枝打ち作業を実施している。林道入り口斜面は一部崩壊しているため、重機により整備する。

[実施状況]

一部急斜面を除いてかつての里道の様相に戻りつつある。



整備された里道

1-4. 岩礁海岸の潮道と島づくり

[目的]

地区の港の南側にある岩礁海岸を有効活用して海岸の生物多様性を創出する。

[方法]

現在の岩礁海岸は、2008年の海底のシルト岩盤の打ち上げもあって、潮の流れがほとんどない状態となっており、多くの浅海域の生物には生息不適な環境となっている。そこで、潮の流れる道をつくり、生物生息環境を創出する。

また、岩礁地帯の陸生植物が島内で減少している現状があることから、岩礁海岸の一部に岩を利用した島をつくり、島内に分布する海浜性の希少植物の生育を促す。

[取り組み状況]

重機による潮の道づくりは完了し、手作業による島づくりを実施している。



左：潮道づくり作業状況、右：潮道

能登島長崎町の里山活動実施エリア



休耕田の整備

休耕田の利用

シードバンクの保全①

ビオトープ造成①



里道の整備

ビオトープ造成④、⑤

シードバンクの保全②

・ミズオオバコ

堂ヶ谷池

鮎ヶ谷池

(ビオトープ造成⑦)

シードバンクの保全③

・イトトリゲモ

・ホツスモ

里山の 



シードバンク②



シードバンク③



シードバンク④

ビオトープ造成⑥

(ビオトープ造成⑧)

シードバンクの保全④

以前付近で、アブノメ (ゴマノハグサ科) を確認。

ビオトープ造成②

ビオトープ造成③

潮道を通した

海底の石が打ち上げられた範囲

の里道を整備



タコツボアパートの設置



図. 里山再生活動実施地点

2. 住民の意見の取りまとめ・計画づくり

2-1. 2009年度推進メンバーによる第1回打ち合わせ

[日時] 2009年6月13日 18:00

[場所] 長崎地区多目的集会場

[出席者] 室屋哲生（会長） 源内伸秀（実行委員長） 中山博 中山利則 室達義孝
中山勝実 高橋久（オブザーバー）

[集約された意見]

目標1 維持管理できるレベルの地域の再生をおこなう。

活動1 畑や田んぼの維持管理の体制、参加のしくみ、里山の管理と利用、維持可能な施設の建設。

目標2 全員が生きていける地場産業の創出。

活動2 特産品の開発と販売 その他のシステム作り。

目標3 昔から良いところを受け継ぐ（衰退への歯止めを含む）。

活動3 自然環境の資産の保全や地域のにぎわいの復活、地域維持のための人的交流。

2-2. 第1回ワークショップ

[日時] 2010年1月31日 多目的集会場

[場所] 長崎地区多目的集会場

[参加者] 23名

[内容]

北陸水生生物研究センター高橋久より地域の自然資源とそれを活かした地域活性化の取り組み事例について報告。その後、課題の整理と取り組みの方向性について話し合った。

[ディスカッションのまとめ]

目標をどこに置くべきか？

集落の人口や活性をこれまで以上のものとするをを目指すのか、現状の維持も目指すのかを議論した。

現在、人口が徐々に減少し、高齢化が進みつつある現状を抑え、あるいは上昇に持つていくためには、何かのブレイクスルーが必要であり、特産品や交流の仕組みを作ることが求められる。一方で、そうした活動には困難が伴うので、それなりの覚悟がいる。

しかし、やっていかなければ衰退し、集落はなくなってしまう。将来、二代目が居れるように今のうちから取り組む必要がある。まずは、やると決めて進めていく。

こうした話し合いの中で、これ以上過疎化を進めないことを目標とするという結論を得た。

活性化の戦略は？

集落を活性化させるために、どのような方法があるか。まずは取り組みの単位として、個人単位で取り組む方向、各人が地域特産品や地元での事業を立ち上げることにより、結果的

に集落全体の活性化につなげる方法がある。また、グループ単位・集落単位で取り組みをおこなう方向がある。さらに能登島の他の集落と共同で能登島全体の活性化を目指す方向がある。加えて、行政との連携を重視していく方向もある。

また、地域活性化において、「能登島自然の里ながさき」はどのような役割を持つのか。事業体にするかNPOにするのか、そこが活動の主体になるのかということがある。

以上のような課題を話し合う中で、NPOにするのも良いという意見が出て、事業体をつくるという意見が出た。それに対して、NPOとしてそれなりの事業をおこなうためには、十分な体制を整える必要がある。活動に専念できる人をどう作るかといった課題が浮かび上がった。

個々人それぞれの仕事があって、とくにそれが集落との関係ない場合は、どうしても片手間では協力できない。方向として仕事・生活と地域活性化が結びついていると良い。まずは、集落の田んぼや里山の維持には集落営農の形があり、生産組合がそうした方向で進んでいくことから、これとの連携を図るのがよい。

特産品については、まずは、集落の特産品で事業化する形が出来れば、その事業に関わる人が核になって新たな展開の可能性が出てくることが期待できる。はなまつも、蕎麦づくりを中心に雇用をつくれるよう、今年度と来年度である程度の骨格をつくって、動き出せば今後の継続ができる。



第1回ワークショップの様子

2-3. 第2回ワークショップ

[日時] 2010年2月28日 9:30

[場所] 長崎地区多目的集会場

[参加者] 18名(婦人会メンバー)

[内容]

地域の特産品をつくることをテーマに、婦人グループに集まっていたいただき、アイデアを出し、その実現性を話し合った。最初に、北陸水生生物研究センターの高橋久より、地域おこしのなかでの女性の役割について、特産づくりの事例について報告があった。続いて参加

者によるフリーディスカッションをおこなった。

[ディスカッションのまとめ]

何を特産品とするか（とくに栽培・養殖）

まずはどのような特産品の可能性があるかということでは、畑はいくらでも余っていて自家消費する以上に野菜が出来ているとの意見が出た。また、山菜もあるとの意見が出て、畑や山を利用した特産品づくりが考えられた。

休耕田を使った特産品づくりの可能性について発言があったが、なかなかつくり物（栽培）は難しいとの意見が出た。どこをどう使うかが重要で、土地の良いところでは作りようがあるが、実際には土作りから始める必要がある。乾いたところでは大豆を作れば良いし、湿ったところであれば、カワエビやドジョウ、マコモなどはできるのではないかと意見が出た。

また、海側の干拓地（新開）の水田が使われてないことから、ここを元の浅海水域に戻す方向での特産品づくりとして、潮の干満を利用してのヤマトシジミ、クルマエビ養殖などが可能ではないかと意見があった。

いかに販売するか

野菜はあるが実際には捨てているので、ゴミステーションの横に旗を立てて無人販売で売ったらどうかという意見が出た。それに対して、売り手と買い手の出会いがないので野菜を捨てる事になっているので、どのようにして出会いをつくるかが大事であるとの補足意見があった。

一方、売る事を考えると負担がかかる。まずは、みんなで作る畑を決めてそこで出来たものをみんなで分けるというところから始めたらどうかという意見もあった。

グループを作って直売をやったらよいという意見があった。オーナー制で土地の人と外部の人が一緒になってやる場所があったらよいのではという意見も出た。

オオバギボウシ（ギフク）を民宿に出したらどうか。山菜コーディネータに学んだり、海藻メニューを考えてみたらよいのではとの意見もあった。

現状

今は皆、70歳まで働いているので休耕田や荒れたところが増える。昔は山の樹木売って生活していたが、今は樹木需要がないため樹を育てる事がなくなり、山は荒れ放題になっている。息子の代では、山がどこにあるのかも分からない。

土地を売ってしまったら、不法投棄場などどうにもならなくなる。そうした事からも里山を守らなければならない。

水ぶき（ウバミソウ）がとれたところに入っていけなくなった。

戦略

昔からやっている料理や、ここにしかないものを特産品にしたら良い。

長崎の味噌は、辛い味噌であるが、ここの塩を使った味噌は味が違う。水がよいから海藻も良い、アジも味が違う、シタダミもうまい、長崎の塩水売り物としたらどうか。

自家消費していたものを少し加工する事によって外の人に受けるかも知れない、シタダミ

を売る食堂のようなものがあっても良い。

山菜や海のもの、激減しないように、民宿に泊まった人限定とかの対策が必要。また、釣り人対策も必要。

オニアサリをまず環境を作って放流してみる。

昔使った塩釜が残っており、塩づくりをやってみたらどうか。塩づくりには、燃料に松を使っていた。とくに枯れた松はすぐに使われた。塩づくり+燃料+里山管理+松茸再生を同時にできるのではないか。松茸再生をめざした塩づくりはおもしろい。課題は、製塩に24時間かかること。

マダケ・山菜の試験的加工品づくりなど、集まれる場所を作ってみんなでやればよい。



第2回ワークショップの様子

2-4. 第3回ワークショップ

[日時] 2010年4月4日 18:30

[場所] 長崎町多目的集会場

[参加者] 10名

[趣旨]

すでに1年間実施してきて、うまくいったところ、改善すべきところ、決定的に欠けているところなどがある。とくに欠けているところとしては、組織的な動きができていない、提案はあるが行動計画がない、共通のイメージがないということがある。そこで、今日はまずは、これまでの活動の振り返りをおこない、欠けているところと改善点を明確にして、行動計画をつくる。

[内容]

北陸水生生物研究センター高橋久より、PDCAサイクルについての説明があり、計画と同時に常に評価・改善が重要である点が指摘された。またアクションプランについての説明があった。いろいろなところで試され済みのハウツーを取り入れて活動をすることによって、これまでの困難の解決を考えたら良いのではという提案があった。計画づくりの第一歩とし

て、組織体制の検討、キャッチフレーズづくり、プランの骨子をつくったらどうかとの提案に基づき話し合いをおこなった。

[これまでの活動の振り返り(出された意見)]

1年間を振り返って、進め方に悪いところがあった。草刈りをお願いした時に時間設定を長くし過ぎた。計画性を持っておこなっていけばよかった。少ない人間、限られた人間のみで動いていった。主にハード面での動きあったが、地域活性化など、総合的には進んでない。まずは、期間が足りなかった。

活動は、里山保全と集落保全と2本立てで動いている。

休耕田のうち2反歩を味噌造りをできるように持っていく段取りとなっている。

昔の方法で塩を一回つくってみよう。

見返りが無いという意見がでてきた。そのなかで自分の仕事が優先される。楽しんでできていない問題があり、今後はゆっくり楽しんで長くやることが目標。

楽しいのはいいが、実際にはあっちもこっちもできない。取り組みの幅が広すぎる。

全体に集まってやるのは難しい。

小遣い程度の収入になるまで4年計画が必要。

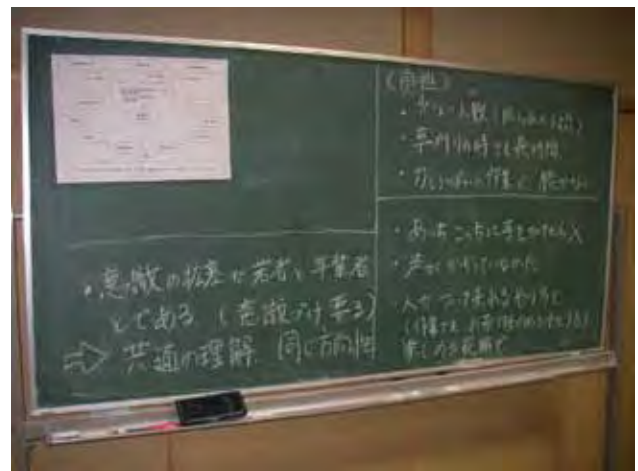
熱心にやっている人がいるので、なにもいえない。実際、一人であれだけやるのはすごい。役所の人も認めてくれている。

一方、個人的にはがんばっているが、全体への声がかかっていなかった。皆、手伝う気持ちはあるが、実際には、その気はあってもなかなかできない。

おっちゃんたち(年配者)の意見はわかるが、若い人には意識の違いがある。若い人は、自分の家が一番。将来を見据えてやるには方向性が必要。意識の格差があるときに、なかなか進まない。

仕事が忙しくとも、できることがある。若い人に意識が浸透していない。田圃に対しての意識が違う。4人しかいない若者が意識を持つためにはどうしたらよいか。

地区のコミュニティが衰退しているのが問題。

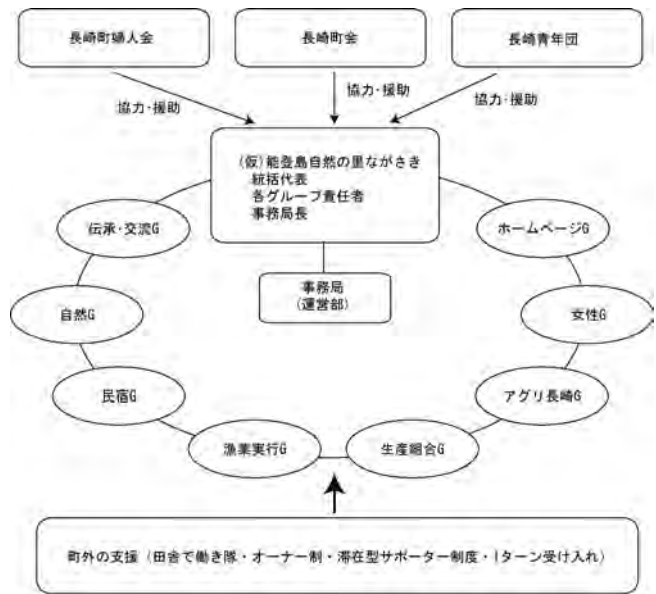


第3回ワークショップの様子

[組織について]

組織図をつくってみた。活動内容ごとにグループを作り、できるだけ集落の全員が参加できるようにしたい。既存組織である町会、婦人会、青年団は協力および援助していただける体制としたい。各グループで6～7人が関わっていただければできると思う。全体プランと各グループの調整はグループ長会議のような形で進め、日常の実務的なことは事務局がおこなう。

事務局の部分が要になるので、やっていただける人がいれば、是非お願いしたい(1名手を挙げる)。また、外部からも人を入れたい。定住者を増やしていく方向と合わせて手掛けるようにして、その成否は収入が得られるようになるかどうかである。全体での補助金の獲得や事業化についての何らかの方策を考える必要がある。



組織図 (案)

[キャッチフレーズ (いくつかの案)]

- 守ろう、生かそう、生かされよう、広めよう。
- すこしでも限界集落を守るんだ。
- 楽しく見直そう。
- 楽しく探そう地域の可能性。
- ◎長く(な) 頑張れ(が) 先の(さき) 希望を。

[มาสคอตキャラクター・ロゴ (案)]

かつての特産品であるマツタケを里山再生の象徴として使ったらどうか。「ながさき」をデザインしたらどうか。集落の人たちの笑顔を取り入れられたらよい。



มาสคอตキャラクター (案)

[今後の進め方]

世代間の連携については、青年団との連携が必要だが、青年団をやっている側も、子供の頃から祭りに携わっているからやっているのであり、基本的には親がすればいいと思っている。親世代と青年団との意志の疎通がないことが問題で、この点の対策が必要。現在、長男のみが農業や集落の仕事を引き継いでいるので、長男にはある程度自覚がある。



ロゴ (案)

計画づくりの中で青年団へ役割分担をしたらどうか。青年団がきても意見は言いにくい雰囲気がある、やらされているという意識になってしまうとの意見もあるが、ここは楽しく勇気を持って意見を言うということで連携をつくっていく。

今後、若い人が残って、最終的に4世帯になってしまったらどうだろう、そうならないか心配をしている。ここが踏ん張りどころ。

祭りによる世代のつながりは大事であり、みんなでがんばる楽しくやれる地域おこしプランをつくる。

[プランづくり]

具体的なプランについては、ワークショップの中でやるには時間が足りないため、それぞれのグループのメンバーを決めてからおこなう。

源内伸秀事務局長が、各取り組みのメンバーの選考をする。

それぞれの進捗状況がお互いにわかるように工夫する。

3. 交流の実践

3-1. 両生類自然史フォーラム

[日時] 2009年8月29日～30日

[場所] 能登島生涯学習総合センター（29日の講演会）

民宿吉兵衛（懇親会）

能登島長喜町（エクスカーション）

[内容]

日本両生類研究会が主催する第11回両生類自然史フォーラムが能登島を会場におこなわれることとなった。200名程度の学会であり、受け入れに適正な規模であると思われたため、長崎地区への宿泊とエクスカーションを誘致した。合わせて講演会での能登島の自然の紹介をおこなった。

講演会の参加者は28名で、特別講演2題と一般講演7題がおこなわれた。石川県よりは7名であり、多くは県外からの参加者であった。北陸三県のみならず、遠くは青森県、東京、千葉、群馬、神奈川県、広島県から参加があった。

特別講演のうち、ひとつを「高齢化と過疎化が進む里山での生物生息環境の保全活動」と題し、七尾市能登島長崎町の自然環境と保全活動の取り組みについて源内伸秀より発表した。

講演会の後は、能登島長崎地区の古民家民宿、吉兵衛において23名が参加しての懇親会がおこなわれた。地区からは、事務局長の源内伸秀、町内会長の室屋哲生と生産組合長の中山博が出席した。両生類の生息環境である里山の保全等について、研究者と地元のメンバーとの活潑な話し合いがもたれた。ほとんどの参加者は、そのまま民宿泊であったので、心おきなく話し合った。舟盛りと海鮮鍋には大変満足していただき、親睦を深めることができた。

翌30日は、エクスカーションとして、長崎地区の両生類や里山の現状を視察していただき

いた。研究会からは19名が参加し、地元からは源内と中山が同行した。まずは、海側の干拓地の現在はヨシ原になっている湿地で、両生類の生息状況を観察した。その後、岩礁海岸でのビオトープづくりの計画について話をした。また、海岸に降りて貝類の観察をおこなった。両生類研究会のメンバーは、フィールドワークの達人ばかりであり、両生類だけでなく貝類にも詳しい人から、そこに生息していたいくつかの貝類について説明を受けることができた。次に川を遡って谷地に入り、水田の両生類や爬虫類、ため池の生物を観察した。さらに奥の谷地は、かつてホクリクサンショウウオが確認されていた場所であり、誰ともなく陸上のサンショウウオ探しが始まった。皆しゃがみ込んで熱心に地面をまさぐり続けた。少し独特であったが大変有意義なエクスカージョンになった。帰りの道すがら、地元の環境保全の取り組みやビオトープの計画について随時説明がなされ、専門家の立場からの意見が出された。



両生類自然フォーラム(講演会・懇親会・エクスカージョン)

3-2. わらじづくり体験

[日時] 2009年12月6日 14:00

[場所] 長崎町多目的集会場

[参加者] 7名(島外参加4名)

[講師] 三田幸雄

[内容]

地域の文化、伝統に興味のある都会の若者を対象にした、わらじづくり体験会を試験的に実施した。長崎町で長く注連飾りづくりをおこなってきた三田幸雄が講師となり、実際縄を結うことからはじめ、わらじづくりを体験した。

地元の若者も加わり、賑やかに体験講座がおこなわれた。体験の後には懇親会をおこない、カキやアカニシ貝など地元の食材の試食もおこなった。



わらじづくり体験と懇親会

3-3. いしかわビオトープ交流会ビオトープ観察会

[日時] 2010年1月30日～31日

[場所] 民宿吉兵衛(懇親会)

能登島長崎地区(観察会)

[参加者] 8名

[内容]

いしかわビオトープ交流会が、会の新年会を兼ねた懇親会と翌日の長崎地内の自然とビオトープの観察をおこなった。地元より源内伸秀が案内人として参加した。



いしかわビオトープ交流会ビオトープ観察会と懇親会